
とある麻帆良の道楽喫茶店主

亜嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある麻帆良の道楽喫茶店主

【Nコード】

N6437S

【作者名】

亜嵐

【あらすじ】

麻帆良学園の北東部にある、小高い丘の雑木林。人気のない道を進んだ先にその店はある。道楽喫茶『月齢』。

客を選び、来る者を選び、去る者を追わず、閑古鳥が今日も無く。

「客の為とか誰かの為にやってる訳じゃない。俺の為に俺がやりたからやってるんだ。文句があるなら出て行け、二度と来なくて結構だ」

何故ならこの店は道楽喫茶、問題ない。

それでも常連客は、この店にやってくる。

「いらっしやい。席なら空いてる。好きな所に座りな」

俺の知ってる○○がこんなキャラクターなはずがない、と言う方は
ブラウザの閉じるを押してください。

不定期更新です、ご注意を。

レシピ1「故に彼の者は来店する」(前書き)

暇つぶしに書き上げました。

不定期更新ですのでその所よろしく。

レシピ1「故に彼の者は来店する」

とある魔帆良の道楽喫茶店主

レシピ1「故に彼の者は来店する」

日本の埼玉県にある麻帆良市、そこに存在する巨大な学園都市、私立麻帆良学園。

その麻帆良北東部に存在する、小高い丘の雑木林。そこにその店は存在する。

知的好奇心で来る事はできず、取材で訪れることも叶わない。

純粹に店に来る事を望んだ時と、その存在が必要になった時、その店は自然と目の前に現れる。

開店時間は日が沈んでから、閉店時間は店主の気まぐれ。休業日もしかり。

何せこの店は、店主の道楽でやっている店だから。

客を選び、店主が神様。客はただの来店者。

『お客様は神様』？ 神様なら人じゃない。人じゃないなら化け物だ。化け物はこの店に来るんじゃない。来たらブチ殺す。人⇨人間じゃないから気を付けろ。むしろ常連は人間以外の連中ばかりだ。嫌なら来るな。売り上げ？ そんなモノに興味は無い。何故ならここは……。

……道楽喫茶『月齡^{げつれい}』。俺が店主の七篠権兵衛だ。文句が有っても聞いてやらないがな。

辺りが夕闇に染まる中、外灯の明かりがその店先を照らす。ドアには『営業中』の札が掛けられている。

店先には立て看板が一つ。

道楽喫茶（茶屋）『月齡』。

今宵も人知れず、営業中。

そんな店先に、一つの人影。

「こんな所に、喫茶店なんてあったのか？」

麻帆良学園中等部の制服に身を包み、人形の様に整った顔立ちの美少女が、金色の頭髪を夜風に靡かせる。

彼女が麻帆良に来て三年。最初の頃は新鮮で楽しかった。学校生活も授業も初めての経験だった。誰かに追われ続けて五百年以上。心の何処かで平穏と安息を求めた。相手の策略によって極東のこの地に縛り付けられたが、ひと時の安息を得られた。

しかし今日、その気持ちも、今までの思い出も全て踏みにじられた。

成長することのない体では進学することが出来ず、二度目の中学生生活を意識した時であった。卒業式以来久しぶりに街で見掛けた、級友たち。近くの喫茶店から遠巻きに彼女達を見かけた時、学校で過ごした日々を思い出し、顔が微笑みかけた。

しかし、彼女達の口から出た次の言葉に、その感情は一瞬にして凍り付いた。

『ねえ、あそこの席に座っている子、すごく可愛くない？』

『本当だ。人形みたいで綺麗』

『あんな綺麗な子、うちの学園にいたっけ？』

『きつと外国からの旅行者じゃない？ あんな綺麗な子がいれば噂になってるはずだもん』

『そうだよね。でも綺麗な髪だねきつと……』

そこから先のことは、よく覚えていない。

誰かに恨まれながらも、憎まれながらも、罵られながらも、知らない誰かが私のことを知っていた。

時に畏怖の象徴として、時に恐怖の代名詞として、時に倒すべき

悪として……。

誰か誰かが、自分のことを知っていた。

忌々しくはあったが、孤独感や寂しさに苛まれることは無かった。

しかし、今のこの気持ちは何だ？ この感情は何だ？

昨日まで親しく笑みを向けてくれた者が、そろって自分のことを知らない他人と指差す。

ここまで寂しさを感じたことは無かった。ここまで孤独感を味わったことも無かった。ここまで酷い絶望感を感じたのは、十歳の誕生日の日以来か……。自分にこのような呪いを掛けた相手を、こんなにも、コロシタイホド、ニクイトオモツタコトハ、ヒサシブリダツタ。

こんなにも酷い仕打ちで裏切られたのは、初めてだ。

家に帰る気力も無く、あてもなく麻帆良を彷徨った。

出来ることなら、この地を出て行きたかった。この時ほど縛られた自分が恨めしかったことはなかった。

いく当てもなく彷徨い、辺りが暗くなったころ、ふと気が付くと、来た事のない雑木林の中にいた。

林道を街灯が点々と照らす中、誘われるように足が前へと進んでいった。

十分ほど歩いた頃だろうか、店先に外灯を点けた、一軒の家を見つけたのは。

店先の立て看板には、『道楽喫茶（茶屋） 月齢』の文字。入り口のドアには営業中の札。

懐かしい感じがした。始めてきた場所なのに、何処か安らぎを憶えた。

フラリとそのドアをくぐっていた。

「いらっしやい。今日は随分と可愛らしい客が来たな。空いてる席、好きな所に掛け給え」

カウンターの向こうでグラスを磨いていた、店主と思わしき男が声を掛けてきた。

黒いバンダナを頭に巻きつけ、白い口髭と顎鬚に縁無し of 眼鏡を掛けた、三十台後半から五十台中頃の壮年と思われる男が一人いた。

とえりあえず、カウンター席一番右端の席に座る。

どこに座ろうか迷ったが、この席が一番落ち着く。そんな気がした。

すぐに水とおしぼりが出される。メニューを見ようと思い探すが、

それらしき物が見当たらない。

「なあ店主。メニューは無いのか？」

「品書きは作ってない。食べたい物を言えがいい。俺のレシピは千を越える」

つまり、客の注文のする料理を用意できる。何でも作れる、そう言っているのである。

なんとも男の自信に満ちた声に、思わずあっけに取られるが、ならば一つ、試そうと思った。

「焼き魚定食、魚は鮭で。それと食後に月楽の茶と栗羊羹」

料理はともかく、食後の茶は普通なら絶対に用意できない代物である。だが店を発見したときから、異様なほどにかき立てられる感覚がある。

五百年ほど前から抱き続けていた感情と、この店に入った時の感情が同じなのである。

確証はなく、推測と憶測でしかない。しかし勘がそうだと告げている。

「では、少し待っていてくれたまえ」

男は少しも表情を変えることなく、調理を始めた。

程なくして出てきた料理はありきたりな、塩鮭の定食。

「いただきます」

まず初めに味噌汁に手を伸ばす。

「……ずっ………っ！」

その味噌汁の飲んで、それは確信した。間違いない、この味を出せるのはあの男だけ。

それから一言も喋らずに、箸を進める。無駄な御喋りは料理と男に対して失礼だ。

「ごちそうさま」

食器が下げられ、男は栗羊羹と茶を持ってきた。そしてお茶を一口。

「……やはり、いつ食べても貴方の料理は美味しい」

この人相手だと、自然と口調が変わる。いつの頃からか、彼とは、彼の前では、自分はこうなってしまう。

「おそまつさま。そう言ってもらえると、此方も嬉しい」

「貴方は相変わらずのようで安心したわ」

「君の方こそ、息災そうで何よりだ。エヴァ」

「貴方も。久しぶりねシルバー。いえ、銀狼」

互いに、どちらからともなく口元が微笑む。

こうして彼女は、再会する。

傷付いた心を癒し、渴いたのどを潤し、凍えた体を温める。

その日、彼女の自宅に明かりが灯る事は無かった……。

「ゴ主人ハ、イッタイドコデ油ヲ売ッテイヤガルンダ……」

そんな呟きが、あつたとか。

おまけ。

「でも、ヒゲ似合いませんよ？」

「ほっとけ、ここまで生え揃うのに十年かかったんだ」

「飲食店でヒゲがあるのも不衛生じゃないんですか？」

「ここは俺の、道楽喫茶だ、だから問題ない」

レシピ1「故に彼の者は来店する」(後書き)

他作品からの来店者募集中。

ようはコラボ？

ちなみに店主は銀狼ですのでプロフィールはくザ・ウォーカーズくを参照。

レシピ2「結果ではなく過程こそ怪盗の醍醐味」(前書き)

二話目からいきなりクロスオーバー。

しかも、大御所さん。

読者様の反応怖いけど、反応見たさに投稿。

「こんなの○○じゃない」という方は、ブラウザの閉じるをクリック。

ケータイの方は電源ボタンを二回押そう。

レシピ2「結果ではなく過程こそ怪盗の醍醐味」

レシピ2「結果ではなく過程こそ怪盗の醍醐味」

高度経済成長を続ける時代においても、変わる事無くそこに在り続ける、一軒の喫茶店が麻帆良学園の北東部の、小高い丘の雑木林に存在した。

まだ、夏の残暑が厳しい九月。夕日が沈むと店先に灯りが灯る。

道楽喫茶『月齢』。

店先の立て看板には、お品書きも書かれている。「冷し中華、麺以外もやってます」。

「いや、中華料理は冷めたら美味くねえだろう?」

来店した客が、看板にツツコミを入れつつ、店のドアをくぐった。

今日来た客は、いったい誰かな?

「いらっしゃい。いつもの席なら空いてるぞ」

そう言って店主の七篠権兵衛（偽名）は、来店した客を席に案内する。

「サンキュー、ゴンちゃん。あいつ等はまだ来てないみたいだな」

客は赤いジャケットの男。

「あと三十分と言った所だろう」

猿顔を髭髯させる、日系イタリア人で猫背気味に歩くのが癖である。

「そっか、じゃあ軽くつまめるもんでも頼むわ」

権兵衛の言葉を、男は然程気にもせず、お絞りと水を受け取って、いつもの席へ付く。

席に座ると、男は懐からこぶし大程もある宝石を取り出すと「ぬひひひひ」と笑いながら、愛しそうにキスまでした。

「それが、今回手に入れたお宝か？ ……ほう、『徳川吉宗の儉約珠』か」

「あ、やっぱりゴンちゃんは知ってたんだコレ」

調理の手を止める事無く、一秒ほど男の持つ宝石を見ただけで、

それが何なのかを看破する。

「ああ、ソレが発見された九州の某所を藩主は、当時八代目将軍になったばかりの吉宗にソイツを献上したんだ。

どういった経緯でソイツが、日本に入ったのかは不明だが、吉宗はソイツを見ながら質素儉約の案件を思い付き、幕府建て直しを図った。

まあ、結果として建て直しは、それなりに上手くいったが、幕府の衰退は止まらなかった。精々数十年伸ばしたに過ぎなかった。

だが、その時吉宗は、儉約して備蓄することが出来た金の一部を、幕府再建の為に何処かに秘蔵したと言われている」

「そして、その秘蔵された金の在り処が、この宝石にあると……」

「そう言う事だ。出来たぞ」

権兵衛は出来上がった料理を持って、男の席に持って行き、向かい側に腰を下ろした。

「鳥の唐揚げは皮と軟骨。漬物は白菜、胡瓜、カブ、茄子。それとアジの開きだ。酒はあいつ等が来るまで我慢しろ」

「分かってるって。じゃまあとりあえず、久しぶりの来店と再会に」

男がコップを片手に持つと、権兵衛もコップを手を持つ。

『乾杯！』

カチン。とガラスの音が小さく店に響いた。

権兵衛と男が談笑をしながら時間をつぶすこと、三十分。本日二人目の客が道楽喫茶『月齢』のドアをくぐった。

「やっぱり先に来てやがったな。おいおい店主まで一緒にかよ」

入ってきたのはスーツ姿の男と、

「権兵衛殿が一緒なら、酒は入っておるまい」

道着袴姿の男の二人組みだった。

スーツの男は目深にかぶった帽子と顎鬚が目につく。道着袴の男は左手に白木造りの杖を持っている。

「ここは俺の店だぞ？　店主が客と一緒に飯を食っちゃいけない道理があるのか？　ないだろう？」

言いながら権兵衛はカウンターに戻ると、二人分のお絞りとコップを持ってきた。

「まあ、確かに無いわな。月齡（ここ）じゃあ」

「分かっているならいい。さて、とりあえず生中でいいか？」

注文も聞かずに権兵衛はジョッキを四つ持って、席まで戻ってきた。

「ああ、ココまで来るのにいい汗かいたしな。しかし、俺はどうも日本の夏つてのはジメジメしてて苦手だねえ」

「かいた汗が、此処に来る途中でお化けを見かけた時に流した冷や汗だからか？」

「なっ……………なんで分かる」

「この時期はよく出るからな。盆の祭事に触発されて、まだ逝っていないのが残ってるのさ」

「おいおい、勘弁してくれよゴンちゃん。さすがの俺様も幽霊相手は勘弁だぜ」

「拙者も見かけたが、あまり邪悪さや害意は感じなかったが」

「ウチの周辺あやしには、簡易的な浄化作用がある布陣をしいてあるからな。たまに怪あやしの客も来るからな」

「相変わらず非常識な場所だな此処は。俺のマグナムが可愛く感じらあ」

「お前等のやってる事も、十分非常識の範疇だって知ってるか？」

『そりゃ違えねえ!』

「さて、それじゃ久方ぶりの再会と」

「お宝ゲットの成功を祈って」

『乾杯っ!!』

男達は杯を掲げる。

「ところで店はいいのかよ」
「すでに閉店状態にしてある」
『……………（いつの間に）』

そんな出会いが、此処道楽喫茶『月齡』ではよくある。

やって来る客は、誰もがその筋では有名でありながら、その所在や居場所を付き止める事が出来ない者達ばかり。

中には……。

「いようマスター。飲みに来たぜえ」

金髪の天然パーマに葉巻をくわえ、赤いインナースーツを着込み、左手にサイコガンを持つ宇宙海賊や。

「マスター。いつものストロベリーサンデーとピザを、ピザはオリブ抜きでな」

銀髪に真っ赤なコートを着込み、背中にギターケースを担いだ悪魔狩人や。

「権兵衛殿、今日は懷石料理を所望する。トロンベ風に」

謎の食通が来たり。もっとも彼は全く謎でもなんでもないが。

中にはこんな客も……、

「ぶるらあああ。調味料何ぞで「黙れ」ぬがああああ」

失礼。コレは間違い。

「マスター。ネジを一盛り」

ネジを食う、世界一の冒険屋や、

「邪魔するぜマスター。とりあえずロックで一杯頼む」

黒いコートにテンガロハットの賞金稼バウンティハンターぎなど。

さまざま世界から、

あらゆる人が、

そして刻さえも乗り越えて、

この店に客は訪れる。

道楽喫茶『月齡』

店主・・七篠 権兵衛

今日も日没から不定期開店休業、致します。

レシピ2「結果ではなく過程こそ怪盗の醍醐味」(後書き)

リリカル書かずは何やってるのという声が聞こえてきそうですが……。

すいません。少し展開に行き詰ってます。

しばらくは見直しと加筆修正で執筆が進みそうに無いです。
勢いだけで書くと後の展開が……。

それはそうとアンケートしたいと思います。

厄神^{やくみ}Ⅱネギ。なのですが、もし殺す事になるとしたら、どこら辺で殺つたらいいでしょうか？

？吸血鬼編でさっさと退場。

？せめて修学旅行編でスクナにでもプチッと。

？学園祭編で魔法をばらす側に付かせて、勢いでサクッと。

？魔法世界編で死ぬべき英雄として殺す。

？赤松作品だから原作主人公は殺してはいけない。

？魔法関係才能のみ殺す。

物騒なアンケートですいません。

？の場合は？〜？と一緒にお願いします。

追伸。

ネギまとりリカルクロスの作品で少ない気がしますね？

まあ、どちらも正義を掲げる馬鹿が多いので、確実に戦争が起きる気がします……。

ちなみに作者は書く気はありませんよ？書くとしても銀狼が第三勢力で双方を殲滅するという、どうしようもない作品になる確率が大きいからです。

「鎧袖一触とはまさにこの事か。何と他愛の無い」という感じに。

では今回はこの辺で。

ちなみに次回は大战期編になると思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6437s/>

とある麻帆良の道楽喫茶店主

2011年10月7日01時28分発行